東京外国語大学『語学研究所論集』30(22), 2025 (Published 2026)
Tokyo University of Foreign Studies, *Journal of the Institute of Language Research* 30(22), 2025 (Published 2026)
＜特集「他動性」＞

ジンポー語の他動性：格枠組みと二項述語階層の観点から
Transitivity in Jinghpaw: Case Frames and the Hierarchy of Two-Place Predicates

倉部 慶太
Keita Kurabe

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：他動性は，項構造，格枠組み，ボイス，アスペクト，語順など，幅広い形態統語現象に反映される重要な言語現象である．従来の研究は他動性を主として範疇的に捉えてきたが，Hopper & Thompson（1980）は 10 の意味パラメータに基づいてその非範疇性を指摘し，また角田（1985, 1991）は被動作性の度合いと諸言語の格枠組みに基づいて二項述語階層を提示した．ただし，この階層が各個別言語においてどのように実現されるのかについては検討の余地がある．本稿は，豊富な格標識を有するジンポー語（チベット・ビルマ諸語）のデータに基づき，格枠組みと二項述語階層の関係を検討する．そして，角田の予測が同言語にもおおむね当てはまることを示す．風間（2014）の他動性の調査票を用いたエリシテーション調査により，階層の左側（「直接影響」「知覚」「追及」）に位置する述語は基本的に他動詞文らしい格枠組みを示す一方，「知識」「感情」「関係」「能力」などの階層の右側に属する述語ではその枠組みからの逸脱が増大することを示す．これらの結果は，二項述語階層の妥当性に対する実証的な裏付けをジンポー語において示すとともに，他動性が言語間の格枠組みのあり方をどのように規定するのかを理解する上でも示唆を与える．

Abstract: Transitivity is a fundamental linguistic phenomenon reflected in diverse morphosyntactic domains such as valency, case marking, voice, aspect, and word order. Previous studies have proposed that transitivity is gradient rather than categorical, notably Hopper and Thompson's (1980) ten semantic parameters and Tsunoda's (1985, 1991) transitivity hierarchy, which classifies two-place predicates based on degrees of affectedness and cross-linguistic case-frame patterns. A key open question is how this hierarchy is realized in individual languages. This paper shows that Jinghpaw, a Tibeto-Burman language with rich case marking, broadly conforms to Tsunoda's predictions. Using elicited data from Kazama's (2014) questionnaire, predicates on the left side of the hierarchy ("direct effect," "perception," "pursuit") display transitive-like case frames, whereas predicates in the "knowledge," "feeling," "relationship," and "ability" classes increasingly deviate from such frames. These findings extend empirical support for the transitivity hierarchy to Jinghpaw and contribute to a broader understanding of how transitivity shapes case-frame patterns across languages.

DOI: https://doi.org/10.15026/0002001474

キーワード：他動性，格枠組み，二項述語階層，被動作性，意志性

Keywords: transitivity, case-frame patterns, two-place predicate hierarchy, affectedness, volitionality

1. はじめに

他動性は，他動詞文・他動詞節に関わる言語現象一般を指し，項構造，格枠組み，ボイス，アスペクト，語順，品詞といった多様な形態統語現象に反映される，極めて重要な言語現象である．他動性を範疇的に捉える伝統的な研究に対して，Hopper & Thompson（1980）は，他動詞文と自動詞文は明確に峻別できないとし，他動性を参与者，被動作性（受影性），アスペクトなどを含む 10 の意味特徴

本稿の著作権は著者が保持し，クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します．
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

から再定義した．Tsunoda ／角田（1981, 1985, 1991, 2009）は，とくに被動作性を他動性の原型的特徴として最重要視し，動作が対象に及ぶだけでなく，対象に変化を引き起こすかどうかが重要な指標であることを指摘した．そして，被動作性の度合いと多様な言語の格枠組みに基づき，二項述語（動詞および形容詞）を 7 類（下位類を含めると 9 類）に分類した二項述語階層を提示した．この階層は，さまざまな形態統語的現象を反映するが，とりわけ格枠組みに関しては，階層の左側に位置するほど当該言語の他動詞文らしい格枠組みをとり，右側に行くにつれてその枠組みからの逸脱が生じるとされる．ただし，角田が主に参照した言語数は限定的であったため，その後，Malchukov（2005），角田・佐々木・塩谷編（2007），風間（2014）などをはじめとして，より多くの言語を視野に入れた二項述語階層の検討が進められている．

本稿の目的は，北ビルマ（ミャンマー）を中心に分布するジンポー語（ISO 639-3: kac）のデータに基づき，格枠組みと二項述語階層との関係を検討することである．ジンポー語はシナ・チベット語族（Sino-Tibetan）チベット・ビルマ語派（Tibeto-Burman）に属し，同語派の多くの言語と同様に豊富な格標識を有している．このため，ジンポー語の格標識体系は，格枠組みと二項述語階層の関係を考察する上で重要な資料的価値をもつと考えられる．しかし，ジンポー語における両者の対応関係は，これまで十分に検討されてこなかった．本稿では，各言語において他動詞文の典型的な構造をとるか否かを調べる目的で作成された風間（2014）の他動性調査票を参照しつつ，二項述語階層の各述語について，ジンポー語ではどのような格枠組みが現れるかを検討する[1]．その結果，二項述語階層の左側に位置する述語ほど他動詞文らしい格枠組みが現れやすく，右側に行くほど他の格枠組みも現れ始めるという従来の想定は，ジンポー語にもおおむね当てはまることを示す．すなわち，1 類「直接影響」，2 類「知覚」，3 類「追及」など階層の左側に位置する述語は，基本的に他動詞文らしい格枠組みをとる．一方，4 類「知識」や 5 類「感情」に属する一部の述語では，他動詞文らしい格枠組みからの逸脱が見られる．さらに，6 類「関係」および 7 類「能力」では，調査文に含まれる多くの述語が，他動詞文らしくない格枠組みをとることが確認された．

本稿の構成は以下のとおりである．まず，第 2 節では，Tsunoda ／角田（1981, 1985, 1991, 2009）による二項述語階層を概観する．続く第 3 節では，ジンポー語の他動詞文における格枠組みを概観し，本稿において「他動詞文らしい格枠組み」とみなす構造を確認する．第 4 節では，風間（2014）の調査票を参照しながら，二項述語階層の各述語がジンポー語においてどのような格枠組みをとるかを検討する．最後に，第 5 節では，二項述語階層とジンポー語の格枠組みとの関係を整理し，従来の想定が同言語にもおおむね妥当であることを示す．

[1] 本稿で提示する資料は，風間（2014）の調査票を用いて 2025 年 9 月に実施したエリシテーション調査によって得られたものである．調査協力者は，ビルマのカチン州ミッチーナー市（Myitkyina）出身の L 氏で，1989 年生まれの女性話者である．L 氏は言語形成期を含む長期間を同市で過ごしており，ジンポー語とビルマ語のバイリンガルであると同時に，高度な日本語運用能力を有する．本調査で用いた調査票には英語およびビルマ語の対訳も存在するが，本稿のエリシテーション調査では，日本語文を提示し，それを直接ジンポー語へ翻訳する形式を採用した．この方法を用いた理由は，第一に，原調査票が日本語で作成されている点に整合させるためであり，第二に，提示言語としてビルマ語を用いた場合に生じ得る言語的影響を可能な限り回避するためである．

2. 二項述語階層

Tsunoda（1981, 1985）および角田（1991, 2009）は，世界の諸言語における二項述語の格枠組みに基づき，(1) のような二項述語階層を提案している．この階層は意味的側面から見ると，左に位置する述語ほど動作が対象に及ぶ度合いが高い．また，左に行くほど動作的で，右に行くほど状態的である．品詞の観点からは，左側の述語はどの言語でも動詞であるが，右側に進むにつれて，形容詞やその他の品詞が現れるようになる．階層の右側では，ほぼ同一の内容を動詞と形容詞の両方で表すことができる場合もある（例：「好く」と「好き」）．

(1)　二項述語階層（角田 2009: 101 を簡略化）

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す	叩く	see	look	待つ	知る	愛す	持つ	できる

格枠組みの側面では，階層の左に位置する述語ほど，他動詞文らしい格枠組み（「他動詞格枠組み」とも呼ぶ）が現れやすい．他動詞格枠組みは，日英語のような主格-対格型言語においては [主格-対格] のような格枠組みを指し，能格-絶対格型言語においては [能格-絶対格] のような格枠組みを指す．一方で，階層の右側に位置する述語では，このような他動詞文らしい格枠組みは現れにくくなり，代わって別の格枠組みが用いられる場合や，他動詞格枠組みと他の格枠組みが共存する場合が見られる傾向がある．このような他の格枠組みには，[与格-主格] や [与格-絶対格] などの与格構文が含まれる．たとえば，日本語では，階層の右側に行くについれて [主格-対格] 以外の格枠組みも出てくるようになる．1B 類（「ぶつかる」）や 5 類（「ほれる」）では [主格-与格] が，6 類（「なる」）では [主格-奪格] が，5 類（「好き」）や 7 類（「得意だ」）では [主格-主格] が，4 類（「分かる」），5 類（「要る」），6 類（「ある」），7 類（「できる」）では [与格-主格] が現れる．二項述語階層と日本語の格枠組みは，以下のように整理される．

(2)　二項述語階層と日本語の格枠組み（角田 2009: 101 を簡略化）

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
	主-対	主-対 主-与	主-対	主-対	主-対	主-対 与-主	主-対 主-与 主-主 与-主	主-対 主-与 主-奪 与-主	主-与 主-主 与-主

さらに，ボイスの観点から見ると，受動文，逆受動文，再帰文，相互文などの構文は，階層の左端に位置する述語では広く用いられるが，右へ行くほど使用されにくくなる．概して，動作が対象に及ぶ場合には自然な文となるが，動作が対象に及ばなくなるにつれて，不自然な文となる傾向がある．

たとえば，日英語では，4 類（「知る」）や 5 類（「愛する」）程度までは受動文の形成が可能であるが，6 類（「持つ」）以降では受動文を作りにくくなる．ワロゴ語では，1 類から 3 類までは逆受動文の形成が可能であるが，4 類以降では不可能である．また，日英語では，4 類から 5 類程度までが再帰文および相互文の形成を許すとされる．

そのほかにも，ロシア語のアスペクト，ワロゴ語の動詞の活用，日本語の動詞の派生，ドイツ語の助動詞の選択，英語の語順などの形態統語現象も，二項述語階層の観点から説明が試みられている．たとえば，ロシア語では二項述語階層の左側に位置する動詞は完了体・不完了体の両形を備える一方，階層の右側に位置する動詞は不完了体のみをもつ傾向があるとされる（角田 2007）．

3. 原型的他動詞文の格枠組み

本節では，ジンポー語の格標示を概観し，本稿において「他動詞文らしい格枠組み」とみなす格枠組みを確認する．ジンポー語は，節と名詞句の両レベルにおいて従属部標示型の言語であり，名詞句の関係はその文法的・意味的な役割を示す一連の格標識によって示される（倉部 2012）．格配列は，主格-対格型のアラインメントを示す．基本的に S 項および A 項は格標識なしで現れるのに対し，P 項は明示的な対格によって標示することが可能である．たとえば，次の文では「彼」（S 項および A 項）が格標識を伴わずに現れるのに対し，「私」（P 項）には対格が付与されている[2]．

(3) ɕi báy sa=ʔay.
3sg again go=DECL
「彼はまた行った.」（KK1-0049）

(4) ɕi ŋay=phéʔ tsóʔ-ràʔ=ʔay.
3sg 1sg=ACC love-like=DECL
「彼は私を愛している.」（KK1-0392）

格標識は名詞句に後続するが，これは OV 型言語に一般的に見られる語順パタンである（Dryer 2008）．また，ジンポー語の格標識が接尾辞ではないことは，それらが後続する語を形態的に選択しないという事実から明らかである．すなわち，語類にかかわらず，名詞句内部でもっとも右に位置する要素に付加される．たとえば，以下の例文では，形容詞や名詞助詞の直後に対格が現れている．

(5) mà-ɕá-gəlaŋ gəbà=phéʔ gàp=dàt=yàŋ...
child-eat-eagle large=ACC shoot=away=when
「大きな子食い鷹を撃つと...」（KK1-0422）

(6) [naŋ... ràʔ=ʔay]=dərám=phéʔ ŋay ɕòʔ=ya=na.
2sg like=NMLZ=nearly=ACC 1sg take=BEN=IRR
「あなたが好きなだけを私が出してあげよう.」（KK1-0784）

[2] 本節で取り上げる実例は，Kurabe（2013）を出典とする．このコレクションには，筆者らが北ビルマでのフィールドワークにおいて採録した約 2,500 件の語りが収録されている．例文に付された KK1-0049 などの番号は，当該コレクション内における識別子である．このコレクションの詳細は，Kurabe & Lu Awng（2022）および倉部（2025）を参照されたい．

次に，ジンポー語において他動詞文らしい格枠組みを見る．角田（2009）は，意味の観点から原型的他動詞文を「動作が対象に及び，かつ，対象に変化を起こすもの」と定義する．さらに，「意味の観点から定義した原型的他動詞文が或る言語において持っている形の特徴がその言語における原型的他動詞文の形の面での特徴である」とする（p.92）．原型的な他動詞には，「殺す」「曲げる」「壊す」「作る」「増やす」「止める」「温める」などがある（p.77）．これらの述語を持つジンポー語の他動詞文は，[ゼロ-対格]（7–8）または [ゼロ-ゼロ]（9–10）の格枠組みをとる．したがって，この 2 つの格枠組みがこの言語における他動詞文らしい格枠組みということになる[3]．

(7) khán=gò ʔnyaw=phéʔ sàt=káw=ʔay.
wildcat=TOP cat=ACC kill=away=DECL
「山猫は猫を殺した.」（KK1-0422）

(8) nday khàʔ=ni ɕi=phéʔ jə-khrìŋ=dá=tîm...
this water=PL 3sg=ACC CAUS-stop=RES=but
「この水が彼を止まらせておいても...」（KK1-0833）

(9) dày-ní ŋay ńtâ gəlo=s-ay.
this-day 1sg house make=COS-DECL
「今日，私が家を建てた.」（KK1-1352）

(10) mà day=gò phún dòʔ=ìná...
child that=TOP tree break=SEQ
「その子どもは木を折って...」（KK1-0439）

原型的他動詞文における [ゼロ-対格] と [ゼロ-ゼロ] の 2 つの格枠組みの違いは，主として示差的目的語標示（e.g., LaPolla 1992; Malchukov 2008）の観点から説明が可能である．ジンポー語では A 項と P 項の語順が比較的に自由であるため，両者が格標識なしで現れると役割が曖昧になる（11a）．この曖昧性は，P 項に対格を付与することで解消される（11b）．曖昧性はとくに，有生性階層（人間 > 動物 > 無生物）において，P 項の有生性が A 項と同等またはそれ以上の場合に生じる．典型的な P 項は A 項よりも有生性の階層において低い位置にあるためである（Comrie 1981: 121）．片方を対格で標示すれば，もう片方をあえて格標示する必要はない．このときに [ゼロ-対格] の格枠組みが現れる．

(11) a. *yú ləpu gəwá=ʔay.
rat snake bite=DECL
「ネズミがヘビをかんだ.」（作例）

b. yú ləpu=phéʔ gəwá=ʔay.
rat snake=ACC bite=DECL
「ネズミがヘビをかんだ.」（作例）

[3] 原型的他動詞文の格枠組みは，日本語では [主格-対格] と [ゼロ-ゼロ] であり，英語でも [主格-対格] と [ゼロ-ゼロ] である（角田 2009: 110）．

一方，P 項の有生性が A より低いなど，双方の役割が自明な場合には P 項をあえて対格で標示する必要はない．このときに [ゼロ-ゼロ] の格枠組みが現れると考えられる．たとえば，以下のような例では，A 項と P 項が混同される恐れがない．「ネズミ」が「服」をかむことはあっても，「服」が「ネズミ」をかむことは現実的にありえないためである．このような場合には，P 項への対格付与は任意になる．

(12) a. yú pəloŋ gəwá=ʔay.
rat clothes bite=DECL
「ネズミが服をかんだ.」（作例）

b. yú pəloŋ=phéʔ gəwá=ʔay.
rat clothes=ACC bite=DECL
「ネズミが服をかんだ.」（作例）

このように，P 項を対格で標示するか否かは，P 項自身の特性（局所的）ではなく，A 項と P 項の相対的な関係（全体的）によって決定される．したがって，以下の例では，P 項の有生性は低いが，A 項の有生性も同等に低いため，対格の付与が必須になる（倉部 2012: 146–149）.

(13) a. day pəloŋ nday pəloŋ=phéʔ kəʔúp=ʔay.
that clothes this clothes=ACC cover=DECL
「その服がこの服を覆った.」（ibid., p.147）

b. *day pəloŋ nday pəloŋ kəʔúp=ʔay.
that clothes this clothes cover=DECL
「その服がこの服を覆った.」（ibid., p.148）

以上では，ジンポー語の他動詞文らしい格枠組みは，[ゼロ-対格] または [ゼロ-ゼロ] であることを確認した．ただし，ジンポー語では，例文（14）のように，移動の着点などもゼロで現れうる．そのため，到着に関する述語も，表面上は [ゼロ-ゼロ] の格枠組みをとる．これは，原型的他動詞文の意味的定義「動作が対象に及び，かつ，対象に変化を起こすもの」（角田 2009: 92）を満たさない．したがって，以下，本稿では [ゼロ-対格] をもっとも他動詞文らしい格枠組みと見なし，[ゼロ-ゼロ] の格枠組みをとる場合は，[ゼロ-対格] と交替できるかどうかも検討する．例文（14）は，[ゼロ-向格] の格枠組みとは交替可能であるが，[ゼロ-対格] とは交替ができないため，[ゼロ-ゼロ] の格枠組みであっても他動詞文らしい格枠組みの例とは見なさない.

(14) ɕi mərе-ɕiŋnom dù=ʔay...
3sg village-outskirt arrive=DECL...
「彼が村はずれに着いた...」（KK1-2196）

4. 格枠組みと二項述語階層

本節では，風間（2014）の他動性調査票を参照しながら，ジンポー語では各調査文がどのような格枠組みをとるかを検討する．この調査票は，二項述語階層における各述語が，各言語において他動詞文の典型的な構造（「典型構造」と呼ばれている）をとるか否かを検討することを目的として作成され

たものである．多くの言語では，[主格-対格] などの他動詞文に典型的な格枠組みをとるかどうかが分析の焦点とされている．なお，風間（2014）の調査票では，Malchukov（2005）などを参照しつつ，角田（2009）の分類に「移動」「社会行為」「言語行動」「相互」「感覚」「作成」が加えられている．また，角田（2009）の「感情」「関係」「能力」といった意味領域には多様な述語が含まれるため，それぞれに下位分類が施されている．以下では，この調査票の例文の順序に基づき，ジンポー語において他動詞文らしい格枠組みが現れるか，あるいはそこからの逸脱が見られるかに焦点を当てて検討する[4]．

4.1 直接影響・変化

「直接影響」は，動作が対象へ及ぶか否かにしたがって，「変化」（1A 類）と「無変化」（1B 類）に分けられる．動作が対象に影響を与える度合いがもっとも高い「変化」は，二項述語階層において，もっとも他動詞らしい述語である．例として，「殺す」，「壊す」，「温める」などがある（角田 2009）．この述語は，多くの言語において，他動詞文らしい格枠組みが期待され，斜格や前置詞などは現れないことが想定される．風間（2014）の調査でも，もっとも他動性の高い述語となっている．ジンポー語においても，（1a）から（1c）のように，他動詞文の典型的な格枠組みである [ゼロ-対格] または [ゼロ-ゼロ] が現れる．なお，以下の例文では，いずれも A 項の有生性が P 項よりも高いため，P 項への対格付与は任意である（第 3 節を参照）．

(1a) ɕi day jìʔnù (=phéʔ) sàt=ʔay.
3sg that housefly =ACC kill=DECL
「彼はそのハエを殺した.」

(1b) ɕi day sədèk (=phéʔ) jə-thèn=ʔay.
3sg that box =ACC CAUS-be.broken=DECL
「彼はその箱を壊した.」

(1c) ɕi day ntsin (=phéʔ) ɕə-lum=ʔay.
3sg that soup =ACC CAUS-be.warm=DECL
「彼はそのスープを温めた.」

次の例文（1d）は，事象キャンセルが成立するか否かを意図した調査項目である．「直接影響・変化」の述語は，対象に影響の及ぶことが前提である．したがって，その事象の成立を表す発話内容をそのあとに撤回するというような事象キャンセルは成立しないはずである（風間 2014: 61）．しかし，東南アジア大陸部諸言語では，事象キャンセルが成立可能であることが報告されている（加藤編 2023）．ジンポー語も，隣接地域の他の言語同様に，様々な述語において事象キャンセルが成立する（Kurabe 2025）．例文（1d）も，ジンポー語においては容認可能な例文である．

(1d) ɕi day jìʔnù (=phéʔ) sàt=ʔay, ráy=tîm n-si=ʔay.
3sg that housefly =ACC kill=DECL COP=but NEG-die=DECL
「彼はそのハエを殺したが，死ななかった.」

[4] 本節の例文番号は，枝番も含めて風間（2014）の例文番号に基づく．

4.2 直接影響・無変化

「直接影響・無変化」は，二項述語階層において，1B 類に位置づけられ，「直接影響・変化」に次いで他動性の高い述語である．これらの述語は，動作が対象に及ぶものの，対象に変化を起こす含みは必ずしももたない．例として，「叩く」，「蹴る」，「ぶつかる」などがある（角田 2009）．ジンポー語でも，例文（2a）と（2b）では，[ゼロ-対格] や [ゼロ-ゼロ] といった他動詞文らしい格枠組みをとることができる．なお，これらの例文では，A 項の有生性が P 項よりも高いため，P 項の対格標示は任意である．

(2a) ɕi day bolúŋ (=phéʔ) thòŋ=ʔay.
3sg that ball =ACC kick=DECL
「彼はそのボールを蹴った.」

(2b) ɕi day la=ná ləgo (=phéʔ) thòŋ=ʔay.
3sg that man=GEN foot =ACC kick=DECL
「彼女は彼の足を蹴った.」

角田（2009）は他動性の原型の意味として被動作性（affectedness）をとくに重視するが，意志性（volitionality）も他動性の原型の要素のひとつとしてしばしば取り上げられる（Hopper & Thompson 1980）．パルデシ（2007）は，南アジアのいくつかの言語において，故意にコップを割った場合には他動詞文を用いるが，不注意で割った場合には用いないことを報告している．風間（2014）の例文（2c）と（2d）は，このような意志性を問題とした例文である（pp.61–62）．ジンポー語では，次の例のように，意志性の有無にかかわらず [ゼロ-対格] という典型的な他動詞文の格枠組みをとることができる．ただし，（2c）とは異なり，（2d）では [ゼロ-共格] の格枠組みも可能であると判断された．これはジンポー語でも意志性の有無が格枠組みに反映されることを示唆するデータである（後述）．

(2c) ɕi day wa=phéʔ dàʔsaŋ ʔədòt=ʔay.
3sg that man=ACC deliberately bump.into=DECL
「彼はその人にぶつかった（故意に）.」

(2d) ɕi day wa=phéʔ ń-dúm-ɕəmyi ʔədòt=ʔay.
3sg that man=ACC NEG-feel-unwittingly bump.into=DECL
「彼はその人にぶつかった（うっかり）.」

「直接影響・無変化」は，角田（2009）の二項述語階層では高い他動性をもつものの，風間（2014）の調査では，かならずしもそうではないことが示されている．その原因のひとつは，これらの述語において対象が場所的な表現で現れる言語があるためとしている（pp.50–51）．一方，ジンポー語では，「叩く」「蹴る」「ぶつかる」などの述語は，次に示すとおり，[ゼロ-位格] のような格枠組みはとらない．

(2cd’) *ɕi day wa (=kóʔ) thòŋ / ʔədùp / ʔədòt=ʔay.
3sg that man =LOC kick / hit / bump.into=DECL
「彼はその人を蹴った / 叩いた / ぶつかった.」

ただし，述語「ぶつかる」については，[ゼロ-対格] のような他動詞文らしい格枠組み（2c–2d）に加えて，[ゼロ-共格] という格枠組みをとることも可能である．この格枠組みは，上述のとおり，無意志の場合に使用可能と判断される．一方，[ゼロ-対格] の格枠組みは，意志でも無意志でも可能であるという．したがって，例文（2c’）は意志か無意志かに曖昧性があるが，例文（2d’）は無意志の場合に用いるのが自然である．

(2c’) ɕi day wa=phéʔ ʔədòt=ʔay.
3sg that man=ACC bump.into=DECL
「彼はその人とぶつかった（故意に / うっかり）.」

(2d’) ɕi day wa=thèʔ ʔədòt=ʔay.
3sg that man=COM bump.into=DECL
「彼はその人とぶつかった（うっかり）.」

このことは，[ゼロ-共格] という格枠組みが，副詞 ń-dúm-ɕəmyi「うっかり」とは共起するのに対して（2d”），副詞 dàʔsaŋ「故意に」と共起すると不自然であると判断されることからも示される（2c”）.

(2c”) ʔɕi day wa=thèʔ dàʔsaŋ ʔədòt=ʔay.
3sg that man=COM deliberately bump.into=DECL
「彼はその人にぶつかった（故意に）.」

(2d”) ɕi day wa=thèʔ ń-dúm-ɕəmyi ʔədòt=ʔay.
3sg that man=COM NEG-feel-unwittingly bump.into=DECL
「彼はその人にぶつかった（うっかり）.」

4.3 知覚 2A vs. 2B

「知覚」（2 類）は，二項述語階層において，「直接影響」に次いで他動詞文らしい格枠組みが想定される述語である．「知覚」には，see や hear などの 2A 類と，look や listen といった 2B 類が区別される．対象の姿や音波を直接捉えている点で，前者は後者よりも対象への及び方が強い（角田 2009: 103–104）．この区別は，2B で前置詞を伴う英語にはよく当てはまるが，2A で [与格-主格] のような格枠組みが現れる日本語には必ずしも適合しない（風間 2014: 62）．Mulchulov（2005: 101–103）も，能格・絶対格型のアラインメントを持つ言語に例外が見られることを指摘している．風間（2014）の調査では，ヨーロッパの印欧語の多くでは，2A が他動詞文の典型構造を示すのに対し，アルタイ諸語では 2B が同様の構造を示す傾向があるとしている（p.45）．ジンポー語では，mù「見える」と yu「見る」，nà「聞こえる」と mədàt「聞く」のように，これらに異なる動詞を用いるが，例文（3a）から（3d）のように，いずれの動詞も [ゼロ-対格] または [ゼロ-ゼロ] といった他動詞文らしい格枠組みをとる．

(3a) ŋay thó=kóʔ məɕà ləkhôŋ məsum=phéʔ mù=ʔay.
1sg there=LOC person two three=ACC see=DECL
「あそこに人が数人見える.」

(3b) ŋay day ńtâ (=phéʔ) yu=ʔay.
1sg that house =ACC look=DECL
「私はその家を見た.」

(3c) ŋay gəday=kún mərón=ʔay (=phéʔ) nà=ʔay.
1sg who=Q shout=NMLZ =ACC hear=DECL
「誰かが叫んだのが聞こえた.」

(3d) ɕi day ǹsén (=phéʔ) mədàt=ʔay.
3sg that sound =ACC listen=DECL
「彼はその音を聞いた.」

4.4 知覚 2A（発見・獲得・生産など）

「発見」「獲得」「生産」などの動詞に現れる目的語は，行為の結果として新たに生じたものであり，「被動目的語」（affected object）に対して「達成目的語」（effected object）として区別される場合がある（風間 2014: 62）.「作成」に関する動詞は，風間（2014）の調査では，ナーナイ語を除くすべての言語で，他動詞文の典型構造を取ることが報告されており，「直接影響・変化」に次いで他動性の高い述語とされている（p.44）．ジンポー語でも，例文（4a）と（4b）のように，どちらも他動詞文らしい格枠組みを用いる.

(4a) ɕi màt=màt=ʔay zòʔ (=phéʔ) mù=ʔay.
3sg lose=COMPL=NMLZ key =ACC find=DECL
「彼は（なくした）カギを見つけた.」

(4b) ɕi duŋ-ləkhûm (=phéʔ) gəlo=ʔay.
3sg sit-chair =ACC make=DECL
「彼は椅子を作った.」

4.5 追及

「追及」は，角田（2009）の二項述語階層の 3 類に位置し，「待つ」や「探す」といった述語がある．風間（2014）の調査では，多くの言語で他動詞文の典型構造が現れ，他動性が高いとされる．ただし，対象が属格をとって動作名詞と結びつくウルドゥー語や，[主格-属格] の格枠組みを取るリトアニア語のような言語も観察される（pp.44–45）．ジンポー語では，多くの言語同様，例文（5a）から（5c）のように，他動詞文らしい格枠組みをとる.

(5a) ɕi modo (=phéʔ) là=to=ʔay.
3sg bus =ACC wait=CONT=DECL
「彼はバスを待っている.」

(5b) ŋay [ɕi sa=wà=na] (=phéʔ) là=to=ʔay.
1sg 3sg go=VEN=NMLZ =ACC wait=CONT=DECL
「私は彼が来るのを待っていた.」

(5c) ɕi gùmphrò-sùmbùʔ (=phéʔ) tam=to=ʔay.
3sg money-pocket =ACC search=CONT=DECL
「彼は財布を探している.」

4.6 知識

「知識」は，角田（2009）の二項述語階層において 4 類に位置づけられる.「知る」「分かる」「覚える」「忘れる」といった述語があり，他動詞文らしくない格枠組みが現れる可能性があるとされる. 一方，風間（2014）の調査によれば，理解・識別・記憶といった意味領域にかかわらず，多くの言語ではおおむね他動詞文の典型構造で現れるとされる．ただし，ウルドゥー語では，「知る」は [絶対格-与格],「分かる」は [与格-絶対格],「忘れる」は [斜格-絶対格] といった格枠組みをとり，典型的な他動詞文の格枠組みはほとんど現れない（p.44）．ジンポー語では，例文（6）から（7）のように理解・識別・記憶にかかわらず，他動詞文らしい格枠組みをとることができる.

(6a) ɕi pha (=phéʔ) =mùŋ ce=ʔay.
3sg what =ACC =also know=DECL
「彼はいろんなことをよく知っている.」

(6b) ŋay day wa=phéʔ ce=ʔay.
1sg that man=ACC know=DECL
「私はあの人を知っている.」

(6c) ɕi *Russia*-gà (=phéʔ) ce=ʔay.
3sg Russia-language =ACC know=DECL
「彼はロシア語ができる.」（直訳「彼はロシア語を知っている.」）

(7a) naŋ [məní ŋay tsun=ʔay] gà (=phéʔ) nóʔ dúm=ʔay=ʔi?
2sg yesterday 1sg say=NMLZ word =ACC still remember=DECL=Q
「あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？」

(7b) ŋay ɕi=ná *phone*-námbát (=phéʔ) məlàp=káw=ʔay.
1sg 3sg=GEN phone-number =ACC forget=away=DECL
「私は彼の電話番号を忘れてしまった.」

なお，例文（6c）のような言語能力に関しては，以下のように [ゼロ-通格] の格枠組みをとることも可能である．通格は経路「～に沿って」や様態「～のように」を標示する格であり，名詞 khu「穴」をその通時的起源にもつ．この [ゼロ-通格] の格枠組みをとる場合は，「ロシア語」ではなく「ロシア人」を通格で標示する．同様の表現は，近隣言語であるビルマ語でも可能である（岡野・トゥザライン 2019: 295）.

(6c') a. ɕi *Russia*=khu ce=ʔay.
3sg Russian=PER know=DECL
「彼はロシア語ができる.」（直訳「彼はロシア人のように知っている.」）

b. ɕi *Russia*=khu ce-nà=ʔay.
3sg Russian=PER know-hear=DECL
「彼はロシア語ができる.」(直訳「彼はロシア人のように理解する.」)

c. ɕi *Russia*=khu lù=ʔay.
3sg Russian=PER get=DECL
「彼はロシア語ができる.」(直訳「彼はロシア人のように得る／できる.」)

4.7 感情 1（好悪）

「感情」は，角田（2009）の二項述語階層において 5 類に位置づけられ，「愛す」「惚れる」「好き」「嫌い」「ほしい」「要る」「怒る」「恐れる」といった述語がある．日英語をはじめとする多くの言語において，他動詞文らしくない格枠組みをとることがある．風間（2014）の調査では，「感情」は「好悪」「需要感情」「怒り・恐れ」の 3 種に分類されている．このうち，ある程度積極的な感情にあたる「好悪」は，比較的制御可能であるため，「感情」のなかで他動性が高い傾向を示している．ただし，感情表現に広く与格構文を用いるウルドゥー語や，「嫌う」に非人称構文を用いるペルシア語のような例も報告されている（p.46）．ジンポー語では，例文（8a）から（8c）のように，他動詞文らしい格枠組みを用いる．

(8a) gənù gəɕà=phéʔ gràỳ tsóʔ-ràʔ=ʔay.
mother child=ACC very love-like=DECL
「母は子供たちを深く愛していた.」

(8b) ŋay ləŋu-sì (=phéʔ) ràʔ=ʔay.
1sg banana-fruit =ACC like=DECL
「私はバナナが好きだ.」

(8c) ŋay day wa=phéʔ n̩-ju=ʔay.
1sg that man=ACC NEG-like=DECL
「私はあの人が嫌いだ.」

4.8 感情 2（需要）

「需要感情」には，「ほしい」や「要る」といった述語が含まれる．風間（2014）の調査によれば，「感情」のうち「需要感情」は，「好悪」と比較して他動性がより低くなっている．「ほしい」と「要る」は，意味的に近似しており，同一述語を用いる言語もあれば，異なる述語を用いる言語もある．また，動詞ではなく，形容詞などを用いる言語も出てくる（p.51）．ジンポー語では，「ほしい」と「要る」には，同一の動詞が用いられる．例文（9a）「ほしい」は [ゼロ-対格] の格枠組みをとることが可能である．ただし，とくに口語においては，P 項は格標識なしのほうがより自然であるという．

(9a) ŋay khyépdin (=phéʔ) rà=ʔay.
1sg shoes =ACC want=DECL
「私は靴が欲しい.」

また，今回のエリシテーション調査によると，述語「要る」は [ゼロ-ゼロ] の格枠組みがもっとも自然であり，[ゼロ-対格] はかなり不自然と判断された．

(9b) yáʔ, ɕi gùmphrò (??=phéʔ) rà=ʔay.
now 3sg money =ACC need=DECL
「今，彼にはお金が要る.」

さらに，述語「要る」では [位格-ゼロ] の格枠組みをとることも可能であり，典型的な他動詞文の格枠組みを逸脱することがある．これは，近隣言語のひとつであるビルマ語にも当てはまる（岡野・トゥザライン 2019: 297）．なお，この場合に [位格-対格] のような格枠組みは用いることができない．また，述語「ほしい」では，[位格-ゼロ] の格枠組みをとることはできない．

(9b') a. yáʔ, ɕi=thàʔ gùmphrò rà=ʔay.
now 3sg=LOC money need=DECL
「今，彼にはお金が要る.」

b. *yáʔ, ɕi=thàʔ gùmphrò=phéʔ rà=ʔay.
now 3sg=LOC money=ACC need=DECL
「今，彼にはお金が要る.」

4.9 感情 3（喜怒哀楽）

風間（2014）では，喜怒哀楽の感情から，感情主体の働きかけの強い「怒る」と対象からの働きかけの強い「怖い」が取り上げられている．これらの述語は，「感情」のなかでもとくに他動性が低いとされ，感情主体が与格や対格で現れるなど，他動詞文の典型的な格枠組みから逸脱する表現を用いる言語も多い（pp.53–56）．一方，ジンポー語では，次の例文（10a）と（10b）のように，補文節や感情の対象に対格を付与することが可能であり，他動詞文らしい格枠組みである [ゼロ-対格] をとることができる．

(10a) nyéʔ ʔnû [gənaw məsùʔ=ʔay] (=phéʔ) pòt=to=ʔay.
1sg.GEN mother yBr lie=NMLZ =ACC get.angry=CONT=DECL
「（私の）母は（私の）弟がうそをついたのに怒っている.」

(10b) ɕi gùy (=phéʔ) khrìt=ʔay.
3sg dog =ACC fear=DECL
「彼は犬が怖い.」

4.10 関係 1（類似・包含）

「関係」は，角田（2009）の二項述語階層において 6 類に位置づけられ，「能力」（7 類）に次いで他動性の低い述語である．「持つ」「ある」「似る」「欠ける」「なる」「含む」「対応する」といった述語がある．これらは状態性の述語であり，他動詞文らしくない格枠組みが現れることが想定される．風間（2014）では，「関係」を「類似関係」「包含関係」「変転関係」の 3 つに分類している．そして，同じ「関係」であっても，「包含」のほうが「類似」よりも他動的表現を好む言語が多いことを報告している．また，「関係」が存在構文によって表される言語があることも報告している（p.52）．ジンポー語でも，「関係」の述語の多くは他動詞文らしい格枠組みである [ゼロ-対格] をとることができない．調査票の「類似関係」は [ゼロ-共格] の格枠組みを（11a），「包含関係」は [位格-ゼロ] の格枠組みをとる（11b）．後者は，位格をとる点で存在文に接近している．

(11a) ɕi gəwà=thèʔ búŋ=ʔay.
3sg father=COM resemble=DECL
「彼は父親に似ている.」

(11b) paŋlay-khàʔ=thàʔ jum lóm=ʔay.
sea-water=LOC salt be.included=DECL
「海水は塩分を含んでいる.」

4.11 関係 2（変転）

角田（2009）は，述語「なる」を「関係」に分類している．風間（2014）は，これを「変転関係」として「関係」の下位類に位置づける．この種の述語では，変化後の名詞がどのような格をとるかがとくに問題となる．述語「なる」はコピュラ文や名詞述語文と深い関係をもち，それらと同一の形式をとる言語がある一方で，まったく異なる他動詞的な表現を用いる言語も存在する（p.53）．ジンポー語では，次の例文（12b）のように，変化後の名詞は（12a）のコピュラ補語と同様に格標識を伴わずに現れる．このように，この述語は表面上は [ゼロ-ゼロ] の格枠組みをとるが，これは [ゼロ-対格] と交替することはできないため，他動詞文らしい格枠組みとは考えられない．なお，（12b）では，述語「なる」は新たな状況の成立を示す変化相によって標示される．この点は，ラオ語や中国語の状況と類似している（ibid., p.53）.

(12a) nyéʔ gənaw sərəwùn rê.
1sg.GEN yBr doctor COP
「私の弟は医者だ.」

(12b) nyéʔ gənaw sərəwùn byìn=s-ay.
1sg.GEN yBr doctor become=COS-DECL
「私の弟は医者になった.」

4.12 能力 1

第 7 類である「能力」は，角田（2009）の二項述語階層において，もっとも他動性の低い述語である．「できる」「得意」「強い」「苦手」「good」「capable」「proficient」といった述語がある．一方，風間（2014: 48）の調査では，他動詞文の典型表現を用いる言語も少なくないことが報告されている．ジンポー語でも，（13a）は [ゼロ-対格] という他動詞文らしい格枠組みをとることが可能である．ただし，とくに口語では対格を伴わないほうが自然であるという．例文（13b）の「泳ぐ」は，基本的に khàʔ「水」が必要になる．この場合，[ゼロ-ゼロ] の格枠組みがもっとも自然であり，「水」を対格によって標示すると容認度がかなり下がると判断される.

(13a) ɕi modo (=phéʔ) ce gàw=ʔay.
3sg car =ACC know drive=DECL
「彼は車の運転ができる.」

(13b) ɕi khàʔ (??=phéʔ) ce phùŋyòt=ʔay.
3sg water =ACC know swim=DECL
「彼は泳げる.」

ただし，例文（13a）と（13b）は，ジンポー語において「能力」（7 類）の例文として適切でない可能性がある．たとえば，例文（13a）では，述語 gàw「運転する」が対格を要求していると解釈できるためである．すなわち，この例文は「能力」（7 類）ではなく「直接影響」（1 類）の例と位置づけうる．あるいは，述語「できる」には動詞 ce「知る」を用いるため，この点では「知識」（4 類）の例とも見なしうる．同じことは，例文（13b）にも当てはまる．すなわち，「水」の対格は述語 phùŋyòt「泳ぐ」が経路に与える格だと解釈すると，この例は「移動」の例ということになる（「移動」の述語類については，第 4.14 節を参照）．あるいは，例文（13a）と同様に，動詞 ce「知る」に着目すると，「知識」（4 類）の例と見なしうる．

したがって，例文（13a）と（13b）に対応するジンポー語文は，「能力」（7 類）の例として不適切である可能性がある．そのため，これらの例に基づいて「能力」に関する述語に他動詞文らしい格枠組みが現れると結論することはできない．事実，「能力」に含まれる「できる」以外の述語である「得意だ」「苦手だ」「強い」などは他動詞文らしい格枠組みをとることができない（第 4.13 節を参照）．なお，角田（2009: 103）で「能力」の例として掲げられている「太郎は英語ができる」は，ジンポー語では例文（6c）で見たように，「彼は英語を知っている」のように表現される．そのため，この文は「能力」ではなく 4 類である「知識」の例文となる．

4.13 能力 2（上手下手）

角田（2009）では，「上手」や「下手」も「能力」に含まれる．風間（2014）の調査によれば，これらの述語は他動性がもっとも低い部類に位置づけられている．これは，これらの述語が時間的に恒常的な性質をもち，形容詞などの要素によって表現されやすいことによるとされる（p.56）．ジンポー語では，[ゼロ-ゼロ] の格枠組みをとるが，これは [ゼロ-対格] といった他動詞文らしい格枠組みと交替することはできない．述語には「なる」や「実現する」を表す動詞 byìn が用いられる．

(14a) ɕi [gà ɕəga=ʔay] gràỳ byìn=ʔay.
3sg word speak=NMLZ very become=DECL
「彼は話をするのが上手だ.」

(14b) ɕi [gəgàt=ʔay] ń-byîn=ʔay.
3sg run=NMLZ NEG-become=DECL
「彼は走るのが苦手だ.」

4.14 移動

「移動」は，角田（2009）の二項述語階層には含まれないが，経路や着点が対格をはじめとする他動的な格枠組みをとる言語も存在する．風間（2014）の調査によれば，「到着」「横断」「経由」のいずれにも他動的な表現を用いる言語，あるいはいずれか 1 項目または 2 項目にのみ他動的表現を用いる言語が確認されている．なかでも「横断」は，他動構造をとる言語が比較的多いとされ，「横断」を表す動詞が「切る」に由来する言語が存在することからもその関連性が伺える（pp.51–52）．ジンポー語では，「移動」の述語はいずれも [ゼロ-ゼロ] の格枠組みをとる．ただし，「横断」と「経由」は，例文（15b）と（15c）のように，これに加えて [ゼロ-対格] の他動詞文らしい格枠組みをとることも可能である．一方，「到着」の着点は対格で標示することができない（15a）．したがって，ジンポー語は「横断」と「経由」に対して他動的表現を用いることができる言語といえる．

(15a) ɕi jòŋ (*=phéʔ) dù=s-ay.
3sg school =ACC arrive=COS-DECL
「彼は学校に着いた.」

(15b) ɕi lam (=phéʔ) dùmphrùt=ʔay.
3sg road =ACC cross=DECL
「彼は道を横切った.」

(15c) ɕi nday lam (=phéʔ) làу=ʔay.
3sg this road =ACC pass=DECL
「彼はこの道を通った.」

移動の述語は，上述の [ゼロ-ゼロ] および [ゼロ-対格] の格枠組みのほかに，向格や位格などの場所的な格を含む格枠組みをとることも可能である．調査項目の 3 つの述語のうち，「到着」の述語は，[ゼロ-ゼロ] に加えて，次の例文のように，[ゼロ-向格] や [ゼロ-位格] の格枠組みをとることができる．

(15a') ɕi jòŋ=dèʔ dù=s-ay.
3sg school=ALL arrive=COS-DECL
「彼は学校に着いた.」

(15a") ɕi jòŋ=kóʔ dù=s-ay.
3sg school=LOC arrive=COS-DECL
「彼は学校に着いた.」

また，「経由」の述語は，[ゼロ-ゼロ] と [ゼロ-対格] に加えて，[ゼロ-位格] の格枠組みももつ．なお，[ゼロ-向格] をとることも可能であるが，意味は「この道の方に通ってきた」になる．

(15c') ɕi nday lam=kóʔ làу=ʔay.
3sg this road=LOC pass=DECL
「彼はこの道を通った.」

(15c") ɕi nday lam=dèʔ làу=ʔay.
3sg this road=ALL pass=DECL
「彼はこの道の方に通ってきた.」

一方，「横断」の述語は，[ゼロ-ゼロ] と [ゼロ-対格] 以外の，[ゼロ-位格] や [ゼロ-向格] といった格枠組みはとらないようである．

(15b') *ɕi lam=kóʔ dùmphrùt=ʔay.
3sg road=LOC cross=DECL
「彼は道を横切った.」

(15b") *ɕi lam=dèʔ dùmphrùt=ʔay.
3sg road=ALL cross=DECL
「彼は道を横切った.」

4.15 感覚 1（生理的欲求）

「感覚」は，角田（2009）の二項述語階層には含まれない．風間（2014）は，「感覚」を「生理的欲求」と「寒暖などの感覚」に二分している．これらは通言語的にいずれも他動性が低いが，ロマンス諸語のように一貫して他動表現を用いる言語も報告されている（p.55）．ジンポー語では，「感覚」に対する述語は自動詞であり，例文（16）から（17）に示すとおり，典型的な他動詞文の格枠組みをとることはない．

(16a) ɕi kóʔsi=to=ʔay.
3sg be.hungry=CONT=DECL
「彼はお腹を空かしている.」

(16b) ɕi khàʔ phàŋ-gəràʔ=to=ʔay.
3sg water water-be.thirsty=CONT=DECL
「彼は喉が渇いている.」

4.16 感覚 2（寒暖）

「寒暖などの感覚」は，上述のとおり，通言語的に低い他動性を示す述語である．ただし，他動表現を用いるロマンス諸語のような言語もある（風間 2014: 55）．ジンポー語でも，次の例のように，一項あるいはゼロ項の感覚述語を用いる．

(17a) ŋay gətsi=ʔay.
1sg be.cold=DECL
「私は寒い.」

(17b) dày-ní gətsi=ʔay.
this-day be.cool=DECL
「今日は寒い.」

4.17 （社会的）相互行為 1

「社会的相互行為」は，角田（2009）の二項述語階層には含まれないが，風間（2014）では「助ける」と「手伝う」が「社会的相互行為」として取り上げられている．例文（18a）では，相手に対格を付与する言語と，そうでない言語の両方が確認される．また，例文（18b）では，対格を付与する言語の中でも，相手に対して付与する言語と，行為内容に対して付与する言語の二種類が報告されている．さらに，これらの述語は二項動詞にとどまらず，三項動詞として現れる言語もある（pp.49–50）．ジンポー語では，これらの述語は二項動詞であり，他動詞文らしい格枠組みをとることができる．例文（18b）では，相手ではなく，行為内容に対格が付与される．

(18a) ŋay ɕi=phéʔ gərum=ʔay / khyé-lá=ʔay.
1sg 3sg=ACC help=DECL / save-take=DECL
「私は彼を手伝った／助けた.」

(18b) ŋay [ɕi ráy phay=ʔay]=phéʔ gərum=ʔay.
1sg 3sg goods carry=NMLZ=ACC help=DECL
「私は彼がそれを運ぶのを手伝った.」

4.18 （社会的）相互行為 2（言語行動）

「言語行動」に関する述語は，多くの言語において三項動詞であり，角田（2009）の二項述語階層の対象外である．風間（2014）では，発話内容に対格を付与し，発話相手に斜格あるいは側置詞を付与する言語を Indirective，その逆に，発話内容に斜格または側置詞を，発話相手に対格を付与する言語を Secundative と分類している．加えて，二重目的語をとる言語や両方とも斜格や側置詞をとる言語も報告されている（pp.46–47）．ジンポー語でも，これらの動詞は三項動詞である．次の例文（19a）と（19b）のように，典型的には発話相手が対格で標示される．これは，発話相手が人間であるため，有生性が同等である動作主との差異化が必要となるためであると考えられる．また，ジンポー語は対格の重出を禁止しない言語であり，発話相手と発話内容の両方に対格を付与することも不可能ではない．一方，発話相手をゼロ，発話内容のみを対格で標示することはできない．

(19a) ŋay ɕi=phéʔ mətʰày sán=ʔay.
1sg 3sg=ACC answer ask=DECL
「私はその理由を彼に聞いた.」

(19b) ŋay ɕi=phéʔ day lam tsun=ʔay.
1sg 3sg=ACC that fact say=DECL
「私はそのことを彼に話した.」

4.19 再帰・相互

「再帰・相互」は，角田（2009）の二項述語階層では扱われていない．風間（2014）の調査では，相互的動作を表す述語は比較的に他動性が高いことが報告されている．日本語の「～と会う」のような非典型構文をもっぱら用いる言語として，奪格を用いるウルドゥー語が確認されている（p.51）．ジンポー語では，例文（20）のように，[ゼロ-共格] の枠組みをとる．

(20) ŋay ɕi=thèʔ khrúm=ʔay.
1sg 3sg=COM meet=DECL
「私は彼に会った.」

5. 結論

本稿では，風間（2014）の調査票を参照しつつ，二項述語階層とジンポー語の格枠組みの対応関係を検討した．その結果，二項述語階層の左側に位置する述語ほど他動詞文らしい格枠組みをとり，右側に位置する述語ほど非典型的な格枠組みが現れやすいという従来の想定が，ジンポー語においてもおおむね妥当であることが確認された．具体的には，1 類「直接影響」，2 類「知覚」，3 類「追及」といった階層の左側に位置する述語は，基本的に他動詞文らしい格枠組みを示すことが確認された．一方，4 類「知識」に属する述語は，理解・識別・記憶といった意味的差異を問わず基本的には他動詞格枠組みをとるものの，一部に [ゼロ-通格] を許容する述語が認められた．5 類「感情」の述語では，他動詞文らしい格枠組みからの逸脱がより明確に見られ，たとえば，「ほしい」は [ゼロ-対格] の格枠組みをとることも可能であるが，口語では [ゼロ-ゼロ] の方がより自然と判断された．また，「要る」では [ゼロ-ゼロ] に加えて [位格-ゼロ] の格枠組みも現れる．さらに，6 類「関係」に属する多くの述語は，他動詞文らしい [ゼロ-対格] の格枠組みをとることができず，代わりに [ゼロ-共格]，[位格-ゼ

ロ]，[ゼロ-ゼロ] といった枠組みが広く確認された．7 類「能力」の述語（「上手だ」「苦手だ」など）も同様に，他動詞文らしい格枠組みは示さないことが分かった．これらの結果に加えて，1B 類「直接影響・無変化」については，風間（2014）が他言語において指摘するのと同様，ジンポー語でも他動詞格枠組みからの逸脱例が確認された．

以上の結果を踏まえると，ジンポー語における二項述語階層と格枠組みの関係は（15）のように整理される．ジンポー語では，自動詞節の S 項と他動詞節の A 項はいずれもゼロで標示される一方，P 項は対格で標示しうるため，同言語は基本的に主格-対格型のアラインメントをもつといえる（第 3 節）．そのため，（15）ではゼロを仮に「主格」と呼ぶことにする．また，[ゼロ-ゼロ] の格枠組みについては，[ゼロ-対格] と交替可能なものを除き，交替が不可能，または交替するときわめて不自然となる型のみを表に示した．たとえば，「関係」の述語である「なる」は [ゼロ-ゼロ] の格枠組みをとるが [ゼロ-対格] とは交替しない述語であり，「感情」の述語である「要る」は [ゼロ-対格] の格枠組みが完全に不可能というわけではないものの，きわめて不自然と判断される述語である（第 4.8 節および第 4.11 節を参照）．さらに，風間（2014）の調査文には含まれていないが，角田（2009）が「関係」類に分類した述語のうち，ジンポー語では [ゼロ-ゼロ] や [位格-ゼロ]，[ゼロ-対格] をとる「持つ」や，[ゼロ-奪格] をとる「欠ける」などが存在する．これらの格枠組みについても，二項述語階層の体系的理解のため，（15）に反映させた．

(15)　二項述語階層とジンポー語の格枠組み

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
格枠組み	主-対	主-対 主-共	主-対	主-対	主-対	主-対 主-通	主-対 主-主 位-主	主-対 主-共 主-奪 主-主 位-主	主-主

一方，Malchukov（2005）は，角田の二項述語階層には二つの異なる次元が含まれると指摘し，一項述語への連続性も視野に入れながら，同階層を二つの下位階層からなる二次元の階層に再分類している．第一の下位階層（直接影響 > 接触 > 追及 > 移動）は，階層の右側へ進むにつれて P 項の被動作主らしさ（patienthood）が低下する系列であり，「壊す」から「行く」へと至る連続を形成する．第二の下位階層（直接影響 > 知覚・知識 > 感情 > 感覚）は，これに加えて A 項の動作主性（agentivity）が右側へ進むほど低下する系列で，「壊す」から「病む」へと連なる．「直接影響」は両下位階層に共通している．この Malchukov（2005）の述語階層とジンポー語の格枠組みとの対応関係は，次の（16）のように整理することができる[5]．

[5] この階層のなかで「移動」と「感覚」は角田の二項述語階層に含まれないが，本稿で確認した通り，「感覚」の述語は，基本的に二項述語ではなく自動詞であり，S 項がゼロで現れる（第 4.15 節）．また，「移動」に分類される述語の格枠組みは多様であり，[ゼロ-ゼロ]，[ゼロ-対格]，[ゼロ-向格]，[ゼロ-位格] などがある（第 4.14 節）．

(16) Malchukov（2005）の述語階層とジンポー語の格枠組み

類	直接影響	接触	追及	移動
格枠組み	主-対	主-対 主-共	主-対	主-対 主-主 主-向 主-位
類	直接影響	知覚・知識	感情	感覚
格枠組み	主-対	主-対 主-通	主-対 主-主 位-主	主

Malchukov（2005）の階層は，各語彙項目がどの格枠組みをとるかを個別に予測することはできないものの，階層のより下位に位置するタイプの述語に他動的パタンをとる例が存在するのであれば，より上位のタイプにも同様の例が存在するという予測を与えることができる（pp.81–83）．ジンポー語のデータはこの予測と矛盾しないと考えられる．

記号・略号一覧

-	affix/compound boundary	COM	comitative	PER	perlative
=	clitic boundary	CONT	continuous	PL	plural
[ ]	nominalized clause	COP	copula	Q	question
1sg	1st person singular	COS	change of state	RES	resultative
2sg	2nd person singular	DECL	declarative	SEQ	sequential
3sg	3rd person singular	GEN	genitive	TOP	topic
ACC	accusative	IRR	irrealis	VEN	venitive
ALL	allative	LOC	locative	yBr	younger brother
BEN	benefactive	NEG	negative		
CAUS	causative	NMLZ	nominalizer		

参考文献

Comrie, Bernard. 1981. *Language universals and linguistic typology*. Oxford: Basil Blackwell.

Dryer, Matthew S. 2008. Word order in Tibeto-Burman languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31(1). 1–81.

Hopper, Paul & Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56(1). 251–299. doi:10.2307/413757.

加藤昌彦（編）. 2023. 『東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル』慶應義塾大学言語文化研究所.

風間伸次郎. 2014. 「特集 他動性：まえがき」『語学研究所論集』19. 33–70.

倉部慶太. 2012. 「ジンポー語の格標示」『京都大学言語学研究』31. 133–180. doi:10.14989/182193.

Kurabe, Keita. 2013. Kachin folktales told in Jinghpaw. Collection KK1 at catalog.paradisec.org.au [Open Access]. https://dx.doi.org/10.4225/72/59888e8ab2122

Kurabe, Keita. 2025. Event cancellation in Jinghpaw. In Hideo Sawada (ed.), *Toward construction of*

a typological and genetic overview of minority languages in Burma, 35–63. Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. doi:10.15026/0002001129.

倉部慶太. 2025. 「失われつつある口承文芸の復興に向けて：ミャンマー北部における取り組み」塩原朝子・吉田ゆか子（編）『フィールド研究を社会に開く：TUFS フィールドサイエンスコモンズにおける言語学・人類学・考古学の試み』, 41–68. 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. doi:10.15026/0002001261.

Kurabe, Keita and Lu Awng. 2022. Kachin orature project: Documentation, archiving, and revitalization of oral heritage in northern Myanmar. In Sarah Sandman, Shannon Bischoff, and Jens Clegg (eds.), *Voices: Perspectives from the International Year of Indigenous Languages*, 75–93. Honolulu: University of Hawaii Press.

LaPolla, Randy J. 1992. Anti-ergative marking in Tibeto-Burman. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 15(1). 1–9.

Malchukov, Andrej L. 2005. Case pattern splits, verb types and construction competition. In Mengistu Amberber & Helen de Hoop (eds.), *Competition and variation in natural languages: The case for case*, 73–117. London & New York: Elsevier.

Malchukov, Andrej L. 2008. Animacy and asymmetries in differential case marking. *Lingua* 118(2). 203–221. doi:10.1016/j.lingua.2007.02.005.

岡野賢二・トゥザライン. 2019. 「現代ビルマ語の他動性」『語学研究所論集』24. 291–301.

パルデシ，プラシャンント. 2007. 「「他動性」の解剖：「意図性」と「受影性」を超えて」角田三枝・佐々木冠・塩谷享（編）『他動性の通言語的研究』, 179–190. くろしお出版.

Tsunoda, Tasaku. 1981. Split case-marking in verb types and tense/aspect/mood. *Linguistics* 19. 389–438. doi:10.1515/ling.1981.19.5-6.389.

Tsunoda, Tasaku. 1985. Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21. 385–339. doi:10.1017/S0022226700010318.

角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』くろしお出版.

角田太作. 2007. 「他動性の研究の概略」角田三枝・佐々木冠・塩谷享（編）『他動性の通言語的研究』, 3–11. くろしお出版.

角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語（改訂版）』くろしお出版.

執筆者連絡先：kurabe@aa.tufs.ac.jp

原稿受理：2025 年 11 月 30 日

刊行年月日：2026 年 3 月 31 日